伝統文化における花の心

――『花戦さ』を中心に――

The Beauty of Ikebana in Traditional Japanese Culture: An Approach for the Power and Spirit, through "*Hana Ikusa*"

彭　　浩

要　　旨

本論文は，『花戦さ』という小説と映画を通して，日本の伝統文化を代表する華道・茶道の美の精神力を究め，また，花人・茶人が命をかけて守ろうとした心の，今日における意義について考えた。更に，権力と文化の関係，権力構造における文化の力について考察し，ソフトパワーとしての文化の力の重要性について探った。千利休が池坊専好とともにわび茶といけばなの美を究め，無駄なものを削ぎ落し，真実の美だけ残して自然のままの命の美しさを最大限に引き出して輝かせてみせた美意識は，わびの心に通じている。この美意識は，以降の日本文化の基準になり，今日まで受け継がれている。権力と文化の力の関係は，重要なテーマの一つである。権力者に近い文化人は大切な役割を果たせる。今日では，政治・経済と並び，国の総合力の一つとして文化の力を大切にしていかなければならない時代を迎えている。花は人と人をつなげて調和の世界へ導く力があり，その力が特に現代社会においては大きな意義があると思われる。

キーワード

いけばな，茶の湯，わびの心，美意識，権力と文化，文化の力（ソフトパワー）

はじめに

俳優の長谷川博己が主演したNHK大河ドラマ『麒麟がくる』最終回（第44回）「本能寺の変」が2021年２月７日に放送され，明智光秀と織田信長の「不思議な友情物語」はまだ記憶に新しい。二百年以上続いた室町幕府を滅ぼす流れを作った人物たちの話で，最終回は，日本の歴史において最大のクーデターであり，謎めいた「本能寺の変」をテーマにしていることで，大きな話題を呼んだ。戦国時代は，戦いばかりで，権力と武力が勝負を決めたことが多い。

戦国時代が終わって四百年以上の歳月が経っている今日においても，戦国時代を題材にする小説，映画，ドラマは多く，戦乱の世を終わらせ，統一した平和の世をつくるという大きな夢を必ず実現しようとする戦国武将たちの生きざまが人々の心を魅了している。そういう作品の中で，千利休は欠かせない存在である。彼は室町時代から安土桃山時代にかけて，わび茶を大成し，織田信長と豊臣秀吉の茶頭として仕えた。最後は切腹で命を落としたその生涯は，物語性が強く，謎の部分が多いため，小説の題材として非常に魅力的である。昭和を代表する歴史小説家海音寺潮五郎が，戦前に発表した「天正女合戦」をベースに著した『茶道太閤記』は，利休と秀吉を対立させ，芸術と権力の相克を重ね合わせたことで，歴史小説における利休像を確立した。野上弥生子の『秀吉と利休』，三浦綾子の『千利休とその妻たち』，井上靖の『本覚坊遺文』，澤田ふじ子の『利休啾啾』は，いずれも利休が主となって書かれている。井上靖の『本覚坊遺文』は，利休の弟子の本覚坊の手記の形で恩師利休に対する回想と夢の中での師との対話を通してその死の真実に迫り，利休の俗世界を超越しようとするわびの心を究めた作品である。日本文学大賞を受賞し，その後，２回映画化された。

平成になってからは，邦光史郎の『利休と秀吉』，井ノ部康之の『千家再興』『利休遺偈』，山本兼一の『利休にたずねよ』，加藤廣の『利休の闇』などがある。山本兼一の『利休にたずねよ』は，第140回直木賞を受賞し，その後映画化された。令和になっても人気は衰えず，伊東潤の『茶聖』が刊行されている。このように，戦国時代を舞台に文化と権力の相克を描くことが受け継がれている。

そのなかで，鬼塚忠の小説『花戦さ』は，これまでとは異なる特別な魅力がある。武力ではなく，文化の力で勝負を仕掛けた，約四百年もの間，京都の華道家元池坊に眠っていた秘話に基づいて書かれた作品である。秀吉に切腹させられた利休の仇を討つため，華道池坊第31世家元・初代池坊専好が秀吉に刀ではなく，いけばなで戦さを仕掛けた物語である。

この小説をもとに，戦国の世に，花をもって平和を求めた専好の伝説を描いた映画「花戦さ」が，2017年６月３日に全国公開された。2017年は，いけばな発祥の地・六角堂創建より1430年，僧侶池坊専慶がそこで花を生けたという記録から五百五十五年を迎えた年にあたる。同年５月24日から29日まで六日間，「花の力――いけばなの根源　池坊展」が，映画「花戦さ」公開記念として日本橋三越で開かれた。そのなかに，特別展示『映画　花戦さの世界展』が設けられ，多くの来場者を集めた。映画公開に先がけたこの特別展示は，映画で描かれた様々ないけばなのイメージを特別映像や実際に撮影で使われた小道具とともに示して来場者を楽しませ，専好の世界観を伝えようとした。花展の案内には，「花の力」について，次のように書いてある。

> 幾多の困難な時代や難局を乗り越え，受け継がれてきた華道の技と心。それを支えてきたのは，日々生成し，枝先を精一杯天に向かって伸ばす草木の持つ力。室町時代には，建築様式の変化とともに，花は

座敷に欠かすことのできない美の象徴として発展した。室町後期には，池坊専応が華道の理念を確立して日本のいけばなの道を示された。その後も池坊は花の名手として朝廷や武家に招かれ，いけばなを披露した。祈りの花から鑑賞の花へ，そして生活の花へと変化してきたが，池坊いけばなは文化となり，その伝統と心は今なお受け継がれている。

映画「花戦さ」は，専好と利休の交流を軸に，華道・茶道・日本画など，戦国から安土桃山時代の日本文化に焦点を当てたが，いけばな展の特別会場では，映画で使われたものと同じような，美しい松を真とした巨大な立花が展示され，人々に衝撃と感動を与え，鑑賞した来場者の心に刻まれた。

本論文は，『花戦さ』という小説と映画を通して，日本の伝統文化を代表する華道・茶道の美と精神力を究め，また，花人・茶人が命をかけて守ろうとした心の，今日における意義について考えたい。更に，権力と文化の関係，権力構造における文化の力について考察し，ソフトパワーとしての文化の力の重要性について探ってみたい。

1．小説『花戦さ』

1–1. あらすじ

本論文で用いる『花戦さ』は，2016年５月に角川文庫より出版されたものであるが，2011年12月，角川書店より『花いくさ』というタイトルで刊行された。作者の鬼塚忠は，紀行作家としてデビューした後，小説を書き始め，『カルテット！』『僕たちのプレイボール』など人気の現代小説を著わしている。そして，池坊に縁があるため，『花戦さ』という戦国小説が生まれた 。

小説は，花と茶をテーマにして権力者と花人・茶人の物語が描かれ，読

者が奥の深い花の世界・茶の世界に惹かれていくような魅力に溢れていると同時に，花人・茶人が命をかけて信念と心を守らなければならない物語であるため，心を打ち，読み応えがある。戦国時代を背景にしたこともあって，厳しい戦いの場面，残酷な死の場面もあるが，優雅でありながら緊張感のある花を生ける場面，厳しくて楽しい花のお稽古場，にぎやかな町の祭りと日常生活のなかの人情，心を落ち着かせる茶室などが描かれている。作者はそれぞれの人物を様々な場面に置いて，その人物像にふさわしい個性を引き出し，生き生きと描いている。

天正10年（1582年）5月，織田信長は，破竹の勢いで天下を手に収めようとしていた。小説は中国方面を攻めることを任された羽柴秀吉が信長の命を受け，毛利方の清水宗治が守る備中高松城を取り囲んで水攻めを選んで信長に援軍を求め，信長が明智光秀を派遣した場面から始まる。光秀は出陣命令を受けたが，備中とは反対の方向にある京に向かって信長がいる本能寺に行き，「本能寺の変」を起した。信長が自害し，天下布武の夢はあっけなく破れることとなった。後から知った秀吉が心の底から敬愛している信長の死を悲しみ，信長の仇をとり，光秀を倒すと決心した。秀吉は強行軍で山崎天王山に行って中腹の宝積寺に陣を敷き，光秀軍を奇襲し，勝利した。

秀吉が天下人の座を目指している頃，京都の六角堂の住職の家系に，代々花の名人を生み出している池坊家があった。執行を務める池坊専栄の甥である作品の主人公・華道家元の初代池坊専好は，立花の素晴らしさでその名を知られ，人々に「生きる力」を与える花を立てていた。花を生ける世界で利休と出会い，尊敬しあい，ともに花と茶の道を究め，親交を深めていた。しかし，利休は絶大な権力をもつ秀吉に疎まれ，切腹を命じられた。大きなショックを受けた専好は花を生ける気力がなくなっている時に，彼を慕う下京の人々の熱い心に支えられ，なんとか立ち直ったが，専好と親交のある人たちが秀吉の権力で次々と死んでいく。巨大な権力に追

い詰められた専好は，ついに秀吉と対決することを決意した。専好は，魂が響き合う親友利休のために，命をかけて花人のやり方で，天下の権力者秀吉に戦さを仕掛け，花人としての心を守ろうとした。彼は花の力で秀吉を征服し，花の戦さで勝った。文化の力で見事に権力に対抗したのである。

鬼塚忠の小説の魅力の一つは，映像を見ているような文体と表現力である。秀吉の備中高松城攻めを描いた冒頭から，最後の花を生ける場面まで，すべてが映像を見ているようで，人と物の動きが見えたり，周りの音が聞こえたりするかのようなリアリティが感じられる。一つの言葉，ちょっとした動作や表情の描写を通して人物の心が鮮明に読者に伝わってくる。

では，小説『花戦さ』を通して権力者豊臣秀吉と花人初代池坊専好・茶人千利休との関係を考察し，権力者と芸に道を究める花人と茶人の関係および彼らの美意識を明らかにしたい。

1–2. 専好の立花——命ある美

専好の立てた花を「立花（りっか）」という。その語源は「仏前供花（くげ）」にある。仏教伝来と同時に，仏前に花を供える「仏前供花」の習慣も伝えられ，仏前には「香炉，蝋燭，花」が供えられるのが一般的である。仏教伝来以前，日本人は自然を畏怖し，敬い，自然と寄り添う暮らしを営んできた。特に「常緑樹に神が宿る」という依代（よりしろ）としての植物観があり，自然界には八百万（やおよろず）の神がいると考えてきた。日本の自然観と「仏前供花」の習慣から，「立て花（たてはな）」が生み出され，やがて「立花」へと昇華していった。足利家全盛期の室町時代，「仏前供花」の形式は「座敷飾り」に発展していく。室町幕府や公家，有名大名にはお抱えの芸術集団「同朋衆（どうほうしゅう）」がおり，決まりに沿った飾りを施していたが，六角堂からその花を否定する人物が出てきた。それが『専応口伝』という花伝書を残した池坊専応で，専好の先々代にあたる人物である。池坊の花は「座敷飾り」の流れと異なり，「町衆の花」

として注目されるようになった。戦さが続いている戦乱の時代を生きる人々の心を癒している[1)]。

花道史研究家の山根有三は『花道史研究』の中で，『専応口伝』について次のように述べた。

> 最古の花の伝書中の『専応口伝』の序に，『抑是をもてあそぶひと，草木を見て心をのべ，春秋のあはれをおもひ，一日の興をもよほすのみならず，飛花落葉のかぜの前に，かかるさとりの種をうる事をも侍らん』とある事から察せられる如く，花をもてあそぶ事それ自身の中にさとりの種をうる事もやとなし，はては『不事有仏縁』として花を立てる事を積極的に肯定する思想的背景を与えたのである[2)]。

花道の歴史からわかるように，日本のいけばなは，仏教禅宗と日本の神道の影響を受けて成り立ったのである。花は本来神仏に供えるための飾りものであり，花を生けること自体は，悟りとつながり，仏縁という思想的な背景がある。花の宗匠は，花の命を尊敬し，大切にしている。専好は専応の教えを受け継ぎ，花に対する考え方は一貫としている。「常に命と向き合い，その花の命を最大限に引き出しながら，見るものにも『生きる力』を与える花。それが目指した花であった」[3)]。「人の命が容易に儚く消えていく時代である。僧侶として花の人として専好は，自分の花で人を勇気づけ『生きる力』を伝えようと懸命だった」[4)]。

作者は小説のなかで数多い専好の立花の作品を披露し，どれも目に見えるように細かくわかりやすく描き，専好が選んだ花を通してその心を伝えようとした。では，作品のなかで描かれた利休と関わりのある専好の立花を通してその心を見てみたい。

① 専好と利休の出会い――清洲城大広間の巨大立花――松

「本能寺の変」の二十数年前。永禄３年（1560年）５月，初夏。24歳の専好は，叔父専栄の代わりに尾張の清洲城・信長の居城の大広間の座敷飾りの立花を立てることになった。専好にとって初めての一世一代の大仕事である。「幅13尺，高さ６尺を超えた巨大な立花であった。真の松の枝は，専好の心の高揚をそのまま映しだしたかのように大きく力強く伸び，空間を満たしていた。その松に対照させたのが，紫と白の菖蒲。まさに旬を迎えた菖蒲が生き生きと咲き誇り，淡いピンク色の躑躅が花瓶口を引き締めた。ちょうど五月の季節をとらえた艶やかな立花に仕上げた」[5]。専好は一瓶の要（かなめ）「真」とする松の枝を手にして，空（くう）に翳（かざ）し，瓶に立てた。その松に菖蒲の花葉を取り合わせる。菖蒲は「勝負」に通じ，菖蒲の葉は刀を象徴した。信長の武運を祈る花であった。最後の仕上げに，花の後ろに一羽のたくましい鷹が描かれている掛け軸を掛けた。生けた松の枝にとまった鷹が獲物を狙っているように見える。これは，鷹狩りの好きな信長を喜ばせるための専好の演出であった。専好が立花の仕上げ作業をしていた時，宗易（利休）が静かに大広間に入ってきて，鋭い眼光で花をゆっくりと眺めていた。専好の立花を褒めたが，「花が怖い」と言い残した。清洲城大広間で専好は初めて利休と出会った。翌朝，信長が威風堂堂とした圧倒的な迫力をもって座敷に現れた。花の前に座り，しばらく無言で見つめていたが，突然，パシッと扇子で膝を打った。「見事なり！」「益々花の道に励まれよ」と専好を褒めた。専好は天に昇る気持ちであったが，宗易の言葉が気にかかっていた。夜，叔父の専栄にその話をした。専栄は静かに言った。「花には必ず心が現れる」[6]。「花との対話を忘れ，花を生かすことを怠った。宗易殿はそれを言いたかったのであろう。つまり心のない花であった」[7]。宗易の「花が怖い」という言葉は，心で花を生けることを教えてくれた。運命の出会いで，専好が心に残る大切な言葉をいただいたの

である。

② 利休と専好の友情を深めた北野大茶湯（きたのおおちゃのゆ）――松

大正13年（1585年）宗易は正親町天皇から「利休」の居士号を賜り，名実ともに日本一の茶人になり，また関白となった秀吉の側近として，諸大名に絶大な影響力をもつようになった。秀吉と利休の蜜月が始まった。秀吉は，絶大な権力を手に入れてからは気にいらない人や物を一切認めず，自らの力を誇示するためにすべて豪華さにこだわり，ついに黄金の茶室まで造るよう利休に命じた。利休にとって茶の湯の心得は「一期一会」であり，無駄なものを削り，「わび茶」の境地を求め，謙虚な心で客を精一杯もてなすことこそ美しいという価値観を尊重していた。利休は不本意ながら利休らしさをちりばめた黄金の茶室を完成させた。秀吉の天下が強固になるにつれて，秀吉にものを言える人間は周りから次第に減り，苦言を呈することができる者は，茶頭の利休と加賀の前田利家しかいない。利家は，信長に仕えていた頃から秀吉と意気投合していた。彼は信長の茶の湯に憧れて，密かに利休を呼び，茶の湯の手ほどきを受けた。大名となってからは「槍の又左」から「美の追求者」となっていく。利家にとって，利休との出会いにも増して人生を変えたのは，専好の花であった。清洲城の末席で秀吉と一緒に見た専好の立花が利家の脳裏に焼き付いて，利休と専好の花についてよく話し合う。専好の花に心が奪われた縁で利休・専好・利家・秀吉の四人が不思議につながっている。

しかし，四人の関係は北野大茶会で変わった。天正15年（1587年）7月。秀吉は九州を平定して京に戻り，新しい政治の中心として造られた壮大かつ華麗な豪邸――聚楽第が秋口に完成するのに合わせて10月1日から十日間，北野大茶会を催すことを決めた。身分に関係なく，朝廷，公家，町人，百姓など誰でも参加できる茶会を茶頭の利休に任せた。利休は秀吉の考えがよくわかり，催しを「北野大茶湯（きたのおおちゃのゆ）」と名付け，北野天満宮の松原の土地

を借りて数寄心(すきこころ)のある人に参加を呼び掛けた。10月１日，敷地内には茶席が八百カ所を設けられ，総勢一万五千人が集まった。利休は茶を振舞って百姓や子どもにも心から喜んで茶を立てた。専好も足を運んで，利休の姿に感銘を受け，花を生けたくなった。真の松の枝を天に翳(かざ)し，松の枝と対話するように様々な方向に動かして，薄(すすき)，若松，伊吹(いぶき)，歯朶(しだ)，撫子，枇杷の葉などを使い，大きな立花を立ててみせた。仕上げに赤く色づき始めた紅葉の枝を花の左側にすーっと伸びるように入れた。町衆は大きな歓声と拍手を送った。たまたまそこを通りかかった利家がその光景を見て感動した。「美を紡ぎ出すことのできる力がある。その美は，生きている美」[8)]。利休は利家にそう言って，専好の命を輝かせる花の美を賛美した。野点の席で楽しく茶を点てた天下一の茶人利休と草木を生けて命を輝かせる天下一の花人専好。二人の天才の競演に京の町衆は心から酔いしれた。

しかし，十日間開催予定の大茶会は，突如一日で幕引きとなった。大茶会初日，秀吉は朝から張り切って自慢の茶道具の数々を並べ，北野天満宮本殿に黄金の茶室まで持ち込んで機嫌よく自ら人々に茶を振舞った。午後野点の茶席を見物して回り，盛り上がっている利休の茶の湯を見た時，華やかな着物を着た若い娘たち三人の声が耳に入った。秀吉の茶室を馬鹿にして「猿や猿や」と笑って，利休の茶と専好の花を褒めていた。秀吉は激怒して，赤く充血した目で人垣のなかにいる利休を一点凝視して，十日間の茶会を一日でやめることにした。

③　専好が利休に捧げた最後の花――桜

小説のなかで，専好の立花の登場が多いが，利休に捧げたのは，一輪の花であった。利休が切腹した後，首がさらされたという噂を聞いた専好は，冷たい雨のなか，息を切らしながら駆けつけた。大徳寺の山門金毛閣に上げられた利休の木像が無残に磔(はりつけ)にされ，その木像の足に踏まれるように利休の首がさらされていた。その場に崩れ落ちて大声で泣き出した専好は利

休の首に這うように近づき，その首に白布をかけてゆっくりと手を合わせた。

> 持参した荷のなかから竹の花入れを取り出し，白布の前においた。（利休殿，あなたは死んでしまいましたが，あなたの茶の湯は，あなたの築いた美は永遠になりました。この戦，利休殿の大勝利です。）専好は六角堂の早咲きの桜の一枝を竹器に挿した。天に昇る利休に届くようにと，寒い冬の間，懸命に力を蓄えその梢（こずえ）を天空へと伸ばしていた枝を選んだ。……この桜の枝には，希望を一杯に含んだ蕾が膨らんでいる。その梢の先端に，今朝花開いた一輪が誇らしげに咲いていた[9]。

作品のなかで一番読者の心を痛める場面であった。小説では，花を生ける場面が多いが，桜の花はこの時だけであった。日本人が一番好きな桜の花。西行法師の歌「願わくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月の頃」[10]を思い出させる。日本人にとって，桜は特別な花であり，わびの心に通じている。利休の茶は「わびの力」であり，命が終わってしまうのではなく，新しい生命が吹き込まれたという積極的な意味をもっている[11]。そういう思いを込めて，専好が桜の花，しかも希望を一杯に含んだ蕾の桜を利休に捧げたのであろう。自分が利休とともに究めた美を守り，受け継いで，後世に伝えようと心のなかで決めたのである。

④　前田邸の大砂物立花――花戦さ――松と紫の花・猿の絵

小説の最後は，一番読者に期待されている専好と秀吉の花戦さである。利休が亡くなり，専好は悲しみと悔しさに苦しんでしばらく花を生ける気力を失ったが，町の人々に期待されてようやく花を生けるようになった。そして秀吉の権力によって命を落とした利休と周りの人たちの仇を討つため，秀吉に戦さを仕掛けようとした。専好は秀吉に信頼されている利家を

説得し，前田邸で立花を立て，そこに秀吉を招くことにしたのである。

文禄３年（1594年）９月21日。前田邸での太閤御成りの五日前。専好は死を覚悟して最終準備を進めている。池坊専武に後世に「花の道」を伝えるよう，叔父から相伝された『専応口伝』を渡し，六角堂を任せた。そして，専武から利休が切腹する前に書いた専好宛の書状をもらい，開いて読む[12)]。９月22日，前田邸の大広間。座敷の床は四間床（7.2メートル）いつもとは桁違いの広さ。大きな砂鉢，銅製の大砂物花器。最初の一本目は松を立てる。この重要な枝「真」は，古くから「心」とも言われ，この一本が作品を決定的にする。十六尺の枝先には，青々とした松の葉が茂っている。松は年中緑を絶やさないことから，日本人が古（いにしえ）より神の宿る木「依代（よりしろ）」として大切にしてきた。二本の松を立てて，季節の花は秋の曲がっている紫の杜若（かきつばた）を選んだ。専好は初めて利休と出会った清洲城の立花に同じく松に紫色の花をあしらった。その時は，５月の若々しく勢いのある同じ紫の菖蒲であった。他には，伊吹（いぶき），柾（まさき），都忘（みやこわす）れ，鳴子百合（なるこゆり），躑躅（つつじ），歯朶（しだ）など，様々な花木がそろっている。専好は今回の立花が人生において最後の取り合わせになると覚悟をしている。

９月26日太閤御成りの日。秀吉が前田邸に到着した。大広間の奥に巨大な花が静けさをたたえて鎮座している。青々とした常磐の松が，風雪に耐え，曲がり曲がったその姿を堂々と見せていた。秀吉は感心して利家とともにゆっくりと花に近づいていき，花の後ろに四幅の掛け軸が掛かっているのが目に入った。なんと木々の枝の上に遊ぶ猿の絵。しかも四幅の掛け軸に合計二十匹にも及ぶ猿である。秀吉の大嫌いな猿！　信長しか秀吉をそう呼ぶことができなかった。秀吉は怒りで肩を震わせている。歩みを進めながら，松の枝からゆっくりと視線を落としていったら，力強い松と対照的に，中段には数輪の杜若が生けられていた。柔らかい曲のある茎の先に，美しい紫色の花が凛とした姿で咲いていた。秀吉は緑の松と紫の花の

取り合わせに吸い込まれるような感覚を覚えた。秀吉は「松に紫の花……松に紫……」と呟いて，はっと何かを思い出したように立ち止まり，扇子を床に落とし，膝から崩れ落ちた。そしてゆっくりと這うように花に近づいていって，目から一筋の涙が流れ落ち，やがて大声を上げて泣きだした。彼は清洲城での専好の花を思い出した。目には花に重ねて信長の生前の姿が映っていた。「茶と花を，人の心を，大事にせえよ。そういう武将になれ」という信長の言葉を思い出していた。秀吉は体から力が抜けるようにその場にしゃがみこんだ。大きな声で「わしは久しぶりにお屋形様にこっぴどく叱られた気分じゃあ」「この花戦さ，わしの負けじゃ。専好殿にそう伝えよ」と叫んだ。無言のまま花を見つめていた秀吉は，やがて小さな声でぽつりとつぶやいた。「利休……，ゆるせ，利休……」[13)]

これは，専好が命をかけた利休の仇討ちである。作者の描写は，映像のようで，読者はその場の動きが見えたり音が聞こえたりして，その場の雰囲気と生き生きとした人物像を把握できるのである。

ここまで，作品のなかに描かれた利休と関わりのある専好の花について見てきた。専好と利休の交流を通して，簡素なわび茶の心と輝く命の花の美に触れてきた。共通しているところは，素直な心で自然の美を最大限に引き出すことである。茶の湯といけばなには，仏教の禅の思想と日本古来の神道の思想背景があり，命を大切にしている。専好の花には，権力にも負けない，自然のままの「生きる命」の素直さと強さがある。戦国時代に専好は，いけばなという日本の伝統文化の力で，権力に戦さを仕掛け，見事に勝利したのである。

1–3. 利休の茶室——わび茶の心

小説のなかで，作者は何回か茶室を舞台にして茶の湯の心を伝えようと

している。一番多く出てきたのは，利休の茶室である。次は，茶室を通して利休のわび茶の心を見ていきたい。

① 利休の茶室に専好を招く

永禄４年（1561年）清洲城の出会いから一年以上が経とうとしていた９月に，専好は宗易に招かれ，彼の茶室を訪れた。宗易は茶を点てながら，専好の花に対する思いを語った。草木の姿と自らの意志でその枝葉は自由に動き，その中に力強い「生きる命」が感じられ，違う材料同士が，他と調和しゆずり合う姿，謙虚な心に感銘を受けた。茶と花，道は違うようで，実は同じで，専好の美にもっと触れたい，立花の美を学びたい，と頼んだのである。それ以来，宗易と専好は互いに訪れ，それぞれ求める茶の道・花の道の美について語り合うようになった。心惹かれあい，土俵は違えども，相通じるものが多々あった[14]。利休は専好の弟子になり，専好の命の花を学んだ。専好も利休の美の世界に心惹かれた。実際，利休の茶の花が，池坊の花の影響を受けたことについて，次の②で述べることにする。

② 利休の茶会――茶と花の精神

天正11年（1583年）秋，利家は利休の茶会に出て，かの有名な秀吉を焦らせて喜ばせた「一輪の朝顔の話」を話題にして専好の花とのつながりについて聞いた。利休はこう答えた。あの朝顔の話は，池坊の花の精神にも通じている。「一輪にて数輪に及ぶならば数少なきは心深し」という池坊の教えがあり，極限までに省略することによってその命の輝きは増す。最高の趣向も同様。極限まで削（そ）ぎ落すことによってその時間と空間は研き澄まされていくのである[15]。

茶の花といけばなは異なると言われるが，ここで，作者は，利休の茶の花と池坊の花の心が通じていることを利休の言葉として語った。川端康成は，1968年ノーベル文学賞の授賞式のスピーチの中で，「一輪の花は百輪の花よりも花やかさを思わせる」[16]と述べ，日本の伝統文化の心を紹介し

た。正直で慎み深いわび茶の心と極限まで省略して最高の命を引き出そうとする花の心は通じている。

③　利休の茶室――利休と秀吉の美意識の違い

天正19年（1591年）正月。利休が切腹を命じられ，前田利家は秀吉に詫びるように説得するために利休の茶室を訪れた。しかし，利休は強い態度で，自分が求めている美は，秀吉と違い，秀吉の派手な茶は茶の湯の本質を失っていると痛烈に批判した。人それぞれ色々あって良い。しかし，秀吉は傲慢にも「美」ですら自分の意に従わそうとしている。利休は自分のわび茶の美が否定されたことを認めることができないと強く訴えた[17)]。作者が利休の言葉として，秀吉の美との違いを語らせ，命をかけてわび茶の美と心を守らなければならないという強い意思を強調した。

④　利休茶室で点てた最後の茶

天正19年（1591年）２月28日，切腹の日。利休の茶室の床の間には，古びた土器の花入れに満開の白玉椿が挿されていた。専好を思いながら最後の茶を点てた。茶と花，世界は違えども，ともに美について語り合えたことに感謝した。茶室を出ていく時，「一度だけ振り返り，もういちど部屋の設（しつら）えを確認した。歩んできた自分の茶の道を確認するかのように。（私の命は取ったかも知れぬが，私の美は絶対に取られない。永遠のものである）利休はそう思いながら切腹した」[18)]。作者は淡々と利休の最期を描いたが，激しい雨と風，満開の白玉椿の花をもって利休の怒りと覚悟を表わし，わび茶の美に対する強い信念を強調した。

⑤　専好が利休宅を訪れる――黒楽茶碗

利休が亡くなって四十九日過ぎたある日，心の整理がついた専好は，利休の妻宗恩に招かれ，利休の茶室を訪れた。専好は宗恩の点てた茶をいただきながら，利休の茶の心と二人の交流について語った。利休の茶は，装飾を削ぎ落し，簡素の中に真の美が宿っている。それは，花にも通ずる真

理である。自然がもともともっている美しさをどう引き出せるのかが，もっとも大切である。専好は利休とともに歩んできた道を懐かしく振り返った。専好は宗恩から，利休が美の原点と考えていた黒楽茶碗を形見として受け取った。利休の心を受け継ぎ，自分は花を生けねばならないとあらためて思った。利休が背中を押してくれているような力強さが体の奥から湧き上がってきた[19]。利休の茶室を訪れ，形見の黒楽茶碗をもらい，生き返った専好は，仇を討って秀吉との戦さを始めようとした。

⑥　前田邸にある利休の茶室

前田邸で専好は花戦さのための巨大な立花を立てた後，前田邸にある利休が設えた四畳の茶室に入り，床の間に利休が愛用した竹の花入れを置き，杜若を投げ入れた。茶室にあう簡素な投げ入れ花。利休の形見の黒楽茶碗を丁寧に出して，そっと畳に置き，利休からの書状を出した。少し物悲しそうな表情の猿の絵とたった一行の文字が書かれていた。

茶のいくさ　花のいくさ　我茶人として生きる　花の人として生きよ

利休が専好に贈った最後の言葉である。自分が最後まで茶人として生きてきたように，花人として最後まで生きよ。刀を持たないで，花を持って戦えということを意味している。専好は利休に期待された通り，花人として見事に花の戦さで勝ったのである。

1–4. 権力と文化力

専好の立花と利休のわび茶は，簡素な美，一切の無駄を省いて素直な自然の美しさを引き出して表現している。二人とも，妥協できない簡素で自然の命の美を確立させ，それを後世にまで，誇れるように伝えていくというような強い意思をもっている。小説は，命より大切な心，また命をかけ

て信念を貫いていく二人の凛とした姿を目に見えるように描いた。茶人として，花人として，自分の信念を貫いて，一番守らなければならないのは，俗世界を超越する素直な心と自然のままの美であることを伝えたかった。利休は村田珠光，武野紹鷗の草庵思想を受け継ぎ，わび茶を大成した。わび茶の心は，紹鷗が「わびの文」に書いたように「正直に慎み深く，おごらぬさま」の心である。専好の無駄をなるべく削り，本質だけを残して生ける花の心と通じているのである。

文芸評論家の細谷正充は『花戦さ』の解説の中で，作品に対して高い評価を与えている。「作者は権力と藝術の相克を，利休と専好を通じてあらわしにしながら，ラストで芸術の力を際立たせる。そこに作者が語りたかったテーマが込められているのだ」と高く評価した[20)]。

2．映画「花戦さ」

映画「花戦さ」（篠原哲雄監督）は，小説『花戦さ』から改編した作品であり，第41回日本アカデミー賞優秀作品賞に選ばれた。音楽は久石譲，出演者は野村萬斎を主演に，市川猿之助，中井貴一，佐々木蔵之介，佐藤浩市などオールスターである。脚本家の森下佳子が描いた人物に血を通わせた。

物語は小説とほぼ同じであるが，映画の内容は少し異なっている。視覚効果を考えて映像の力を生かして小説で表現できないシーンを作ったり，内容を増やしたりして話を面白くしている。

2-1．物語と役者

戦国時代，京の中心・六角堂に池坊専好（野村萬斎）という花僧がいた。出世も名誉も興味なし，何より花を愛する「けったいな」この男は，人々の幸せと世の安寧を祈って花を生ける日々を送っていた。ある日，時の権

力者・織田信長（中井貴一）の御前で，専好はいけばなを披露することになる。生けたのは前代未聞の巨大な松であった。信長は専好に問う。「何ゆえ，このような松を？」「昇り龍でございます！　天に向かってこう，ぐわわぁぁあ――っと！」。人気狂言師の野村萬斎が専好を好演した。無邪気で明るくて滑稽な声と表情の演技は，小説では感じられない専好の親しみやすい魅力的な人間像を見事に表現し，深く印象に残る。

小説では，専好と利休の再会は，運命の出会いから一年後であったが，映画では，十数年経ってからである。その後二人は美を追い求める者同士として友情を深め，互いの道を高め合っていった部分は，小説と同じである。ただ二人の数々のシーンは，野村萬斎と佐藤浩一の素晴らしい演技によって，人物の個性が小説より鮮明になっている。最後に専好が立ち上がって，民のため，友のため，暴君と化した秀吉（市川猿之助）に挑んだ一世一代の大勝負が始まるが，専好が手にしたのは花！　花で秀吉を討つ！　専好の花で仇を討つ場面について，野村萬斎はインタビューで「狂言師って大名に抱えられながらも，大名をあげつらう演目もある。だから僕にはその案配が分かる」[21]と話した。

前半，専好の表情が明るくて豊かであったが，後半，利休や市井の人たちとの別れを重ね，表情が次第に硬くなり，感情とともにめまぐるしく上下していた眉も動かなくなる。「生を謳歌していた専好が，多くの別れを経て心の底にオリがたまっていく。そして最後，秀吉に対するときには死を賭す覚悟を決めたのです」と野村萬斎が言う[22]。秀吉と向き合う最後の場面は，「専好だったらこうするだろう」と思い付いた案が採用され，ラストは大きく変わったと言う。タイトルに「戦さ」の文字が入る映画であるが，勝ち負けがテーマではない。「言葉じゃない芸の力，花の力をもって説得できた」と野村萬斎は言う。劇中に登場する数多くのいけばな作品とともに，専好が優しく語りかける映画に仕上がった[23]。映画のなかで，

それぞれの人物は俳優たちの素晴らしい演技により，個性豊かで，映画から飛び出してきたかのように生き生きとしている。

2–2. いけばなと日本画

映画では，約二百ものいけばな作品が登場し，専好の作品は『花伝書』や絵図に残る作品を元に再現した。立花の素晴らしさは，小説では想像しかできなかったが，映画では映像の迫力によって，その構図の美しさ，力強さと可愛らしさを実際に自分の目で見ることができて，存分に楽しむことができる。

専好が立てた巨大な松を生ける作品が特に印象に残っている。なぜ大きな松を生けるのか。華道家元四十五世池坊専永は『たおやかな花のように麗しい生き方』という本の中で，次のように述べた。

> 芭蕉は「造化に随い造化に帰る」ことを説きました。“造化”とは，天地や自然の摂理のことで，いけばなで行なえる手近な処理の仕方を例にとるならば，あるがままの素材としての松を見つめることです。そうすることで松の美しさが新しい事実として心に映ります。自分の心に映った松の美しさを発展させていってこそ，人の心を打ついけばなができ上ります。
>
> 我を捨てるということ，あるいは「造化に随う」ということは，人間がもつ限りないあこがれを見定め，心から自然に溢れ出る素朴な気持ちと素材のもち味を重ね合わせて，香気の漂う世界に没入することではないかと思います。
>
> ほのぼのとした香気のなかに，生けた人の個性と志操がにじみ出るようないけばな。私はこうしたところを目指して，いろいろな松を生けていきたいのです[24)]。

我を捨て，自然の造化に随い，素直な心で，自分の心に映った松の美しさを表現したら，人の心を打ついけばなができあがるということで，やはり素直な心をもつことが一番大切なのである。

小説では，描かれていない日本画の魅力が印象的であった。映画では，数多くの少し悲しそうな猿の絵が掛けられ，立花の緑と紫色の花枝の間に揺れている。それが秀吉の心を打ち，反省させた。実際，秀吉はこの猿の絵を見て，信長の言葉を思い出して，反省した。猿の絵は，大きなパワーを感じさせているだけでなく，人々の心にも焼き付いたのである。

映画「花戦さ」は，原作に基づいて制作されたが，役者の演技，実際のいけばなの作品や日本画の披露により，小説を読むだけでは想像できないダイナミックな世界が広がり，色彩と音声も加わって，臨場感に溢れ，短い時間のなかで，大きな歴史の感動を与えてくれた。

3．六角堂頂法寺と華道家元池坊の歴史

3-1. 六角堂と華道池坊

紫雲山頂法寺六角堂は，京都の中心にあり，587年（用明天皇２年）に聖徳太子が建立した古刹である。その創建は，太子16才の時，持仏であった如意輪観世音菩薩の夢告（むこく）により六角堂の御堂を建立して，この持仏を本尊に祀ったと言われている。太子創建にかかるこの縁起は，鎌倉時代初期に『六角堂縁起』として，醍醐寺本『諸寺縁起集』に所載されているものが今日現存しているもっとも古い資料と言われている。しかし，これ以前より，観音霊場信仰や太子信仰の興隆とともに，この縁起は人々に膾炙されていたと思われ，鎌倉時代末に五山僧である虎関師錬が編集した仏教史書『元亨釈書』にも取り上げられ，霊験ある仏閣として崇拝されていた様が窺える。また寺伝によると，古来，六角堂の執行を勤めた池坊の由来は，太子が沐浴をした池泉の傍らに入道した小野妹子が住坊を構えたことか

ら，その名を池坊と号するようになった[25]。

その頃，仏に花を捧げる仏前供花という風習も伝わってきた。代々六角堂の住職も務める池坊は，仏前に花を供えるなかで様々な工夫を重ね，室町時代の「いけばな」成立に至る。室町時代に「池坊が生ける花は素晴らしい」と評判になった。1462年（寛正３年），東福寺の禅僧の日記『碧山日録』に「池坊専慶（当時の六角堂住職）が花を挿し，京都の人々の間で評判になった」という記述があり，これは華道家元池坊が「花を生けた」という最初の記録とされている。

六角堂頂法寺の始祖とする住職は聖徳太子に遣隋使として隋に派遣された小野妹子である。小野妹子は，華道家元池坊の道祖でもあり，遣隋使として知られる小野妹子の墓前祭が，毎年その命日である６月30日に全国から約四百名の門弟が集まり，大阪府南河内郡太子町の小野妹子廟において厳かに行われ，道祖の偉業を偲ぶとともに華道の更なる発展を祈念するのである[26]。

3-2. 前田邸・専好が立てた砂大物立花

華道家元池坊公式ホームページに，「初代・池坊専好」のページがあり，「毛利邸・前田邸の花」と題した記述がある。江戸時代に編纂された『俗群書類従』に二つの記録が収められている。両方とも豊臣秀吉の大名御成りに関するもので，座敷飾りの花を池坊が担当したとする。その二つ目は「文禄三年前田邸御成記」で，文禄３年（1594年）９月26日，秀吉が大阪の前田邸を訪れた時の記録とされる。華道家元池坊公式ホームページよると，二つ目の，秀吉が訪れた時に生けられた前田邸の花の記述には，宮内庁書簡部史料の写真とともに，以下の記録が添えられている。

（大広間）同三之間四間床に四幅対猿かうの絵掛もの，下に六尺二三尺

の六亀の図砂之物鉢，大松の真ヲ似なひき枝二て，掛物の猿かう二拾疋有しを，松二とまりたるやう二さす也，池之坊一代出来物と風聞ありしなり（文禄三年前田亭御成記）

即ち，秀吉に対して，猿が二十疋も飛び交う掛物を背景に華道の大作が造られたということである。これに対して，次のような説明も添えられている。座敷飾りの全体を指揮したのは，茶人として知られた武将の織田有楽斎（織田信長の弟）で，専好が大広間三之間の床に松の大砂物を立てた。間口が四間（約7.2メートル）もある床は，この時代に満ち溢れた豪壮な気風にふさわしいもので，そこに掛けられた四幅対の絵の中に猿二十匹が大砂物の松の枝で戯れているように見えた。

この記録と説明からもわかるように専好が前田邸で立てた大砂物立花を披露したことは，宮内庁書簡部に保管されている資料「文禄三年前田邸御成記」に裏付けられた史実である。専好が秀吉に切腹させられなかったのは，語り継がれている理由がある。つまり，専好は利休の死で心を痛め，秀吉に猿が飛び交う立花を見せることで，信長のことを思い出させ，初心にかえらせた。自ら傲慢さに気づき，反省させることで，利休の仇討ちを果たした。

この秘話を原作者と映画関係者に紹介したのは，池坊華道会事業部の徳持拓也である。彼は次のように話した。華道をはじめ日本文化には，人の心を整える力がある。戦うも許すも人の心であるので，文化の力で整える必要がある。世界情勢が不安な今，この秘話が映画になることで，多くの人がこのことに気づいてほしいと願っている[27)]。

3-3. 池坊専応口伝

室町時代後期の16世紀前半，池坊専応がいけばな理論を確立し，一般に

『池坊専応口伝』と呼ばれる花伝書を著した。そこには，単に美しい花を観賞するだけではなく，草木の風興をわきまえ，「よろしき面影」を大切にするという高遠な美意識がつづられ，それが悟りの境地につながるものだと説かれている。この教えは，歴代の家元によって継承され，現在も生き続けている[28)]。いけばなの思想や技法をまとめた専応は「壊れた器や枯れた枝にも価値がある。風が吹いて花が散り，葉が落ちることは，単に季節が移っただけではなく，命が移り変わっていくこと。すべてこの世は無常と悟ることもできる。」とその書『専応口伝』で述べている。「枯れた花にも華がある」という教えは，生きとし生けるもの，すべてに価値があり，意味があり，美があるという，多様性の素晴らしさを説いている[29)]。

4．いけばなと茶の花

『花戦さ』は，初代池坊専好が，千利休の仇を討つため，豊臣秀吉に花で戦さを仕掛け，花の力で権力に勝った物語である。先ほど述べたように，宮内庁書簡部に前田邸で専好が秀吉に猿の絵を掛けて巨大な立花を披露したことを記録した史料がある。では，実際，専好と利休の間にどういう交流があったのか。互いにどういう影響を与えていたのかについて，考察してみよう。

裏千家教授の桑原宗典は『利休の茶の花――いけばなと茶の湯』という本の中で，利休と初代専好との交流関係を明らかにした。初めて翻刻となる『齢花集覧』に所収の伝書など大切な史料に基づいていけばなが利休に与えた影響とその花に込められている思想について次のように詳しく論じた。

茶席では掛物と並ぶ重要な役割を持つ茶花。千利休の生けた茶室の花は，どのような花だったのか。現代では，それぞれ独立したものと語られる「いけばな」と「茶花」は，その成立過程を遡れば，両者の根源にある

共通性がある。室町時代を通じ，その様式が確立されつつあったいけばなは，桃山時代から江戸時代にかけて非常に大きな発展を遂げた。いけばなの世界において，かつてない雄大な造形美を誇る立花が求められるようになっていた。創成期に三つの系統即ち同朋衆系（阿弥系）と谷川流，池坊があり，桃山時代から江戸時代初期には池坊専栄・専好の名ばかりが目立つようになる。池坊がほぼ主流になっていた。「立花」様式を完成させたのも，池坊専栄・初代専好・二代専好であった。真からの草体化による展開と発展という構造は，同時期に発展を遂げた茶の湯においても共通して見られるものである。利休は台子の茶を否定し，草庵の茶こそ茶の湯の理想であると主張しつつも，茶の湯の根本はあくまでも真の位をもつ台子の茶にあると説いた。茶の湯の花の成立には，茶の湯が座敷飾りの法式を草体化していく過程のなかで，その場にふさわしい花の姿が求められてきたことが大きく関係している。座敷飾りの法式を基に整備されたものである以上，茶の湯が座敷飾りの重要な要素の一つであった立花および立花師との関係をもつことは必然であったのである。『松屋秘伝』には武野紹鷗が池坊を招いてその花を賞翫した話が見られる。そうした交友関係を見る限り，座敷飾りの草体化の過程において，そうした場にふさわしい花の姿について，当時の茶人が立花師に意見を求めたりして，逆に茶人の花に立花師が影響を受けることもあるであろう[30)]。

寛政６年（1794年）に成立した『齢花集覧』は，こうした茶の道と花の道との間に確実な影響関係があったことを，利休と専好との関係を通じて示す花道伝書である。『齢花集覧』に「古哲生花四箇伝」と題する伝がある。その内容は，利休が茶の花に新しい創意を考え，初代専好に同意を求めた伝であり，利休による伝として考えられている。利休は専好の弟子になったかどうかについては諸説があるが，少なくとも茶の花に関しては，初代専好との間に交流関係があったと考えられる[31)]。桑原宗典は，西堀一三の

先行研究を次のように紹介した。西堀一三は，茶匠と花匠の心と技の触れあう接点が，紹鷗の時代にすでに追求されており，そのような花の伝統が，利休と初代専好の交わりを結ばせ，伝書を授受する間柄を生んだのであろうと指摘している[32)]。桑原宗典は，利休の花と初代専好の関係について，次のように述べた。

> 利休の花とは，それぞれ共通する基盤を持っていた茶と花の道が，こうした時代的な流れの中に新しい姿を現していくなかで，利休と専好という稀有な才能の持ち主を得て大きく花開いたものであった。……もはや利休の花であるのか，初代専好の花であるのかも判然としない。その花を最終的に伝として伝えたのは初代専好であったが，利休と初代専好のどちらがいなかったとしても，このような花は生まれることはなかったであろう[33)]。

桑原宗典は，本の中で，利休の言動を直接に見聞きしていた宗旦が折にふれて話していた内容を書き留めた茶の湯の逸話集『茶話指月集』を引用して，利休の「一輪の朝顔の花」について説明している。

> これはよく知られている利休の朝顔の茶会の逸話である。庭に咲いていた朝顔をすべて摘みあげて，たった一輪を床の間に生ける。この逸話について，付記がある。「このように咲いた花を皆取り払い，一輪だけを床に生けて人をおもしろがらせようとするのは利休の本意ではない。一輪だけを床に生けたのが，利休の物数寄の優れたところである[34)]。

利休の七則のなかでは，「野の花のように」とある。『茶道聚錦 3　千利

休』では，これについて，次のように述べている。

> 茶席の花は，珠光の頃の書院茶の湯における「たて花」「立花（りっか）」から，紹鷗を経て利休によって大成された草庵茶の湯の出現で大きく変わる。広間においての花は，座敷飾り・床飾りの式正の一つにすぎなかったが，小間の侘びた茶室においては，一瓶の花が重要な役割を担うこととなる。利休は，一種類の花を一枝か二枝，かろかろと入れよ，と指示して，「時の賞翫」としての茶はなを重視した。草庵茶の湯においては，掛物よりも，むしろ麁相な花入に入れられた四季折々の草花に，茶会のテーマが象徴されるといっても過言ではない。「花は野に有る様」（利休七ヶ条）といった利休の茶はな意識には，侘びの本質が含まれているといえよう[35)]。

ここまで見てきてわかるように，専好は利休のわび茶の精神性を自らの立花に生かす一方，利休は専好から池坊の花の心と技を学んだ。互いに学び合い，自らの芸術性を高めていったことは確かであろう。茶の道と花の道をともに究めて，時代にふさわしい美を求めることは，遡れば，村田珠光，武野紹鷗の時代から，すでに始まっていた。基盤が同じ日本の伝統文化を代表する茶の湯といけばなは，素直な心をもって，少しずつ様式を変えながら時代とともに発展してきて，今日まで至っている。

5．むすびにかえて

2016年鬼塚忠が書いた小説『花戦さ』が出版され，2017年に小説に基づいて作られた映画「花戦さ」が公開された。「花の力――いけばなの根源池坊展」も合わせて開かれ，いけばなのブームを起こした。初代池坊専好という人物は，野村萬斎の素晴らしい演技によって，もっと知られるよう

になった。利休が専好とともにわび茶といけばなの美を究め，無駄なものを削ぎ落して，真実の美だけ残して自然のままの命の美しさを最大限に引き出して輝かせるという美意識は，わびの心に通じている。この美意識は，以降の日本文化の基準になり，今日まで受け継がれている。日本の茶の湯，いけばなをはじめ，現代建築，美術，アニメ・漫画を含めたサブカルチャーなど，あらゆる分野においてわびの心が生かされており，日本的な美は，世界で認められ，注目されている。これは，『花戦さ』が人気を呼んだ理由の一つであると思われる。

『花戦さ』のもう一つのテーマは，権力と文化の力の関係である。戦国時代に，千利休は，織田信長と豊臣秀吉の茶頭として仕え，茶の湯を教えるだけでなく，秀吉に苦言を呈する二人の中の一人であり，武将たちの間でも影響力をもっていた。権力者と文化人の関係は非常に興味深い。同朋衆の存在や権力者は文化的な教養を高めるため，茶の湯やいけばなを嗜んで，茶会を開いて立派な立花を立たせて披露した。時には危ない目に合うかもしれないが，専好は花の力で，秀吉の権力に対抗して，見事に力を発揮できた。ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授がソフトパワーの概念を提示して以来，多くの国が文化の力を GDP と並べ，国の総合力の一つとして文化政策を考えるようになった。今日は，政治・経済と並び，文化の力を大切にしていかなければならない時代を迎えていると思われる。

『花戦さ』は，花は調和の世界をもたらす力があることを提起した。「花戦さ」の映画が公開されてから，華道家元池坊次期家元・池坊専好（「華道家元池坊」の45世家元。1989年次期家元に就任。2015年に専好を襲名した）が『朝日新聞』のインタビューを受けた。そのなかで，花は人と人をつなげて調和の世界へ導く力があると語った。人の生き方，社会のあり方にも何かを訴える花は大きな力があり，その力が特に現代社会においては大きな意義があると強調した。次期家元池坊専好のメッセージは，とても大切な

ので，以下のようにまとめることにする。

いけばなの始まりは仏教からであった。池坊は仏前供花だけに終わらせないで，人と花との関わり，さらに花を介在させて，人と人とのつながりも考えてきた。いけばなは生き物の命をいただいているゆえ，生死と裏表にあり，常に瀬戸際，瞬間を意識せざるを得ない。だからこそ，人と人をつなげる力を強くさせる働きがあるととらえている。池坊には「数少なきは心深し」という言葉がある。たくさん集めた造形よりも，一輪，二輪の花，一枚，二枚の葉，ひと枝二枝。最小限のボリュームで，ぐっと凝縮する。それは飽食と言われる今の時代性にも合致している。身の丈に合ったミニマムに生きる。制約があるから，かえってエネルギーが凝縮される。少なさは寂しいことでも貧相なことでもない。多くのメッセージが読み取れ，伝えられる。

では，なぜ花には，そういう伝達力や人をつなぐ力があるのか。花は人間にとって非常に象徴的な存在だからこそと思われる。人の心を表している。国さえも象徴できる。戦場に花は似合わないし，咲くこともできない。花は平和の象徴でもある。花が咲くことができるのは，環境が保たれているというバロメーターでもある。そうした見えない積み重ねがあって，花は咲き，今がある。思いを寄せて，共感する。そうした作業がとても大切である[36)]。

専好は現代の世界情勢にあわせ，次のように問題提起をした。日本だけでなく，世界で格差や排除がまかり通るようになっている。強者の論理が横行し始めている。それは，互いの違いを見ないところから始まったのであろう。最初から違うということを承知していれば，相手を知ろうという興味や尊敬や敬意も生まれてくるし，自分自身はどうあるべきかを考えるきっかけにもなる。現代の社会が違いを前提としない，知ろうとしない社会だとすれば，とても窮屈で住みづらい時代だと思われる。物差しは一つ

だけじゃない。違う尺度があるのが世の中だと思うことが大切である。それを一番実感できるのが，文化の世界だと思われる。複眼的な見方や多様性の大切さを提示する一助になれる[37)]。

池坊のいけばなには生花，自由花などいくつかの形がある。花器に様々な花を生ける立花は音楽にたとえるとオーケストラ。多種多様な花を使い，それぞれの枝や花が，各自の個性と働きをもちながら，お互いを生かし合っていて，そして一つの理想とする調和した形を作り上げるものになる。それぞれの存在と働きを存分に生かし合いつつ，対峙ではなく，一つの時空をともにして調和を作り出す。違いを認め合い，支え合うことで実現される世界。所詮は花であるが，されど花の示すメッセージである[38)]。

花と生きる専好は，このインタビューの中で，「命いただく華道　瞬間を意識させ　人と人をつなげる」「一輪一輪の美　互いを認め合い　調和する世界へ」というメッセージを花を通して，世に送っている。乱世を生きて，花を生かし，人を生かした初代池坊専好が，命をかけて利休の仇を花で討つ。その秘策は，人間の和と世界の調和を目指した花の力であった。平和を愛して求め続ける花は，五百年前でも，今の時代でも，変わらぬ力を発揮できることは素晴らしい。茶道裏千家15代家元・千玄室大宗匠は，利休の心と美を受け継いで，一碗の茶で世界の平和をもたらすと唱えて実践している姿にも尊敬の意を表したい。

注

1)　鬼塚忠『花戦さ』角川文庫，2016年，44-45頁参照。
2)　山根有三『花道史研究』中央公論美術出版，1996年，14頁。
3)　鬼塚忠『花戦さ』角川文庫，2016年，43頁。
4)　同書，44頁。
5)　同書，66頁。
6)　同書，73頁。

7)　同書，74頁。
8)　同書，119–120頁参照。
9)　同書，157頁引用。
10)　久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波文庫，2017年版，20頁。
11)　千玄室「わび　利休の哲理」，『わび』淡交社，参照。
12)　鬼塚忠『花戦さ』角川文庫，2016年，240頁参照。
13)　同書，266–271頁参照。
14)　同書，75–81頁参照。
15)　同書，109頁参照。
16)　川端康成『美しい日本の私』講談社，2006年版，26頁。
17)　鬼塚忠『花戦さ』角川文庫，2016年，144–145頁参照。
18)　同書，153–154頁参照。
19)　同書，167–171参照。
20)　細谷正充「解説」『花戦さ』角川文庫，2016年，279頁。
21)　「芸の力で語りかける『花戦さ』に主演　野村萬斎」『朝日新聞』夕刊３版　文・伊藤恵里奈，2017年５月26日。
22)　同上。
23)　同上。
24)　華道家元四十五世池坊専永『たおやかな花のように　麗しい生き方』日本華道社，2016年，42–50頁参照。
25)　華道家元池坊総務所　池坊中央研究所『歴代家元譜―華・歌・仏―図録・いけばなの流れ一』，日本華道社，平成18年，54頁参照。
26)　https://www.ikenobo.jp/information/9398/　2021年２月10日　アクセス。
27)　「池坊専好の「花戦さ」，利休の仇・秀吉に一矢　約400年間　京都に奥ゆかしく眠っていた秘話に迫る」，日経ビジネス，殿村 美樹　2017年３月25日 https://business.nikkei.com/atcl/opinion/16/122600033/032100007/ 2021年２月９日アクセス。
28)　https://www.ikenobo.jp/　2021年２月10日アクセス。
29)　「人はなぜ花に惹かれるのか。「花で語る」―華道家元池坊次期家元・池坊専好にインタビュー」，聞き手　編集委員・駒野剛人，『朝日新聞』2018年１月10日13版　参照。
30)　桑原宗典『利休の茶の花　いけばなと茶の湯』思文閣出版，2016年，89頁参照。
31)　同書，90頁参照。
32)　同書，94頁（西堀一三『茶花』河原書店，1949年，198頁）参照。

33）　桑原宗典『利休の茶の花　いけばなと茶の湯』思文閣出版，2016年，141頁。
34）　同書，159頁。
35）『茶道聚錦３　千利休』小学館，1983年，305頁。
36）「人はなぜ花に惹かれるのか。「花で語る」―華道家元池坊次期家元・池坊専好にインタビュー」，聞き手　編集委員・駒野剛人，『朝日新聞』2018年１月10日13版　参照。
37）　同上。
38）　同上。

参考文献

鬼塚忠『花戦さ』角川文庫，2016年
華道家元四十五世池坊専永『たおやかな花のように　麗しい生き方』日本華道社，2016年
華道家元池坊総務所　池坊中央研究所『歴代家元譜―華・歌・仏―図録・いけばなの流れ一』，日本華道社，2006年
川端康成『美しい日本の私』講談社，2006年版
桑原宗典『利休の茶の花　いけばなと茶の湯』思文閣出版，2016年
久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』岩波文庫，2017年版
千玄室「わび　利休の哲理」，『わび』淡交社，2002年
西堀一三『茶花』河原書店，1949年
細谷正充「解説」『花戦さ』角川文庫，2016年
山根有三『花道史研究』中央公論美術出版，1996年
『茶道聚錦３　千利休』小学館，1983年
「芸の力で語りかける」『花戦さ』に主演　野村萬斎」『朝日新聞』夕刊３版　文・伊藤恵里奈，2017年５月26日
「人はなぜ花に惹かれるのか。「花で語る」―華道家元池坊次期家元・池坊専好にインタビュー」，聞き手　編集委員・駒野剛人，『朝日新聞』2018年１月10日13版
https://www.ikenobo.jp/information/9398/
https://www.ikenobo.jp
https://business.nikkei.com/atcl/opinion/16/122600033/032100007